

危機一髪

大牟田市 緒方 東

昭和20年6月18日の夜、真っ暗闇に乗じて数人の仲間と摩文仁の断崖を下り、米軍の機関銃掃射を真上から受けながら、海を泳ぎ通して、夜明けに漸く断崖を少し離れたこの海岸の洞窟に隠れ住み、もう幾日が経っただろうか。

竹トンボと呼んでいた米軍の観測機がまいたビラで、6月23日第32軍司令官の自決と戦闘の終結を知ったが、それからこの出来事までどれだけの日々が過ぎたか、定かに覚えてはいない。

初めは一緒にいた仲間も、いつの間にか散り散りになって、この洞窟には、私だけが高熱の続く身を横たえていた。

(註) この洞窟というのは、巨大な岩が寄り合ってきた一坪半位の岩の隙間で、小石のごろごろした細長い空間であった。

一片の食糧も、飲み水もなく、その上夜ともなれば襲い来る蚊の大群にも、防ぐ手立てのない敗戦の身であった。寝たきりの私は、時折うつろな目でぼんやりと岩肌を眺めては、差し込む明かりの反射で時刻の移りを推し測った。体力が日に日に衰えていったある日の朝、突然降ってわいたような非常の事態に、私は命の灯が一瞬にして消える運命の瀬戸際に立たされたのである。

高熱にうかされ、朦朧とした夢うつつの私の耳に不意に聞えたのは、まさしく外国語の響きであった。それが米兵達の話し声であることは、とっさにわかった。同時に、私の体に電流のように緊張が走った。

ああ、時既に遅し！。米海兵隊の一団が数名のグループに分かれて、海岸地帯にひそむ日本兵の掃射にやって来たのだ。しかもグループは、私がおの下に横たわっている岩山の入口に立っているではないか。赤く日焼けした裸の上半身がちらっと見えた。彼等はおのおの自動小銃を構えたまま、何やら大声で話し合っている。「おい、この穴が怪しいぞ。調べてみよう。」と言っているに違いないと私は思った。早く隠れなければ危いと気はあせったが、狭い岩屋で隠れる場所はなく、高熱の体は硬直して思うように反応しなかった。「どうぞ見つかりませんように」「早く立ち去ってくださいように」と全身全霊で祈ったが、彼等はいっこうに移動する気配はなかった。

何を話しているのだろうか。会話が分からない私には、これ以上の不安はなかった。早鐘のように動悸を打ちながら、私は出来るだけ入り口から見えにくい位置で、体を岸壁に吸いつけて息を殺した。そして今まで使用したことのない拳銃を握りしめた。

一斉に彼等の自動小銃が火を吹くか、手榴弾、黄燐弾が投げ込まれるか、いずれにしても私

の命は100パーセントないものと覚悟した。誰か入って来たら1発射って、返す銃で自決を決めて、私は次の瞬間を待った。

と、その時、今まで私が寝ていた石ころの上の古毛布が、ゾロゾロと入り口へたぐり寄せられていくではないか。私の起き上がりが10数秒でも遅かったら、私は完全に発見されていたのである。引き寄せられた毛布の端が、入口に見えている。

米兵達の会話が一段と大きくなったように感じた。「おい、毛布はまだ温かいぞ」「まだこの近くにいるはずだ。探せ、探せ」きっとそう言い交わしていたに違いない。一人の兵士の手が、薄暗い洞窟のなかへスーッと伸びて、入口の辺りで何か手探りするような仕草をしていたが、南無三……その指先が、私の左腕にパサッとふれたではないか。

瞬間、胸の鼓動は破裂せんばかりに高鳴り、察知されはしないかと消え入る思いで私は最後の運命を待った。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……血を吐くような思いで神仏にすがりながら、左手で腹に巻いていた父の形見の千人針を、渾心の力で握りしめ、右手は己れの命を絶つことになるであろう拳銃を、覚悟を決めて握り直した。射ち込まれる銃弾で蜂の巣になるか、手榴弾で吹き飛ぶか。殺されるのが先か、自決が先か……。この光景がどんなものであったか、そして私の形相が、二度と演じることのできない人間の断末魔寸前の姿であったとして、今それを正確に言葉にすることは不可能である。

人の運命の分かれ道を、神仏はどうやって決めて下さるのだろうか。気絶しそうな緊張の極みにあったこの数分、いや数十秒だったかも知れないこの時間の長かったこと、これまた適切な表現の方法を知らない。

やがて彼等は、私の存在にもどうやら気付かなかったように、ガヤガヤと話し合いながら、私がその下に隠れている大岩の上にあがって、やがて彼等の会話も遠のいていった。

だがこの恐怖は、凍てついたかのように私の心から消えなかった。いつまた引き返して来るかも知れない不安は、このあと、9月6日だったと記憶しているが、日暮れの海岸ではるかな故郷を偲んでいた私に、親しげに話しかけてきた日本軍の将校らしい人と、その後には若い米軍士官と兵士の3名から、穏やかな口調で投降の勧告を受け、屋嘉の収容所に入るまで、決して消えることはなかった。危機を救ってくれた千人針も、収容所ですべて没収、焼却の運命となり、こうして私の沖縄戦は終わったのである。

平成5年9月6日、私は妻を連れて初めて摩文仁の丘に立った。48年の歳月が経ったとは言え、きれいに公園化され、慰霊碑が建ち並ぶ丘の、何という静けさ。追いつめられたあの地獄の台地がここだったのか。私の追憶は、どうしても今の静寂と結びつかなかった。吹き来る海風だけが粛々としてあの日を語りかけてくるように思えた。

沖縄の空よ、摩文仁の台地よ、あの凄絶な戦いの日々は、何であったろうか。7万有余の将兵と、14万人とも言われる平和なこの島の人々を、無残にも犠牲にした沖縄戦とは、いったい何だったのか。私は軍事司令官が自決したという断崖に立って、張り裂ける胸の思いを天に向かって叫ばずにはいられなかった。

眼前に広がる太平洋の静かな輝きとやさしい波は……これが48年前と同じ海、同じ波であったのだろうか。吹き来る海風を全身に受け止め、おびたしい人々の痛恨の血潮が流れた摩文仁の丘を往きつ戻りつ、重い足取りをたどりながら、この島で私は、数えきれないほど運命の岐路に立たされたが、そしてなお九死に一生を得られたのは、まぎれもなく亡き父の加護によるものであったと、父の霊に感謝した。まことに父の加護があればこそ、私は今もそれを信じて疑わないのである。